

著者からのひとこと

丹羽京子著

『Rabindranath Tagore & Japan: Collected Essays』

Hornbill Press、2022

その関係が20世紀初頭にまで遡る「タゴールと日本」は古くて新しいテーマだが、そこには今に至るまで幾多の誤解も存在する。タゴールは1916年にノーベル賞受賞後初の外遊として日本を訪れており、その際の顛末については「当初はたいへんな歓迎を受けたがスピーチで日本批判をしたために一気にタゴール熱が冷めた」というのが長い間定説となっていた。しかし資料を丹念に読めば、事はそう単純ではないことがわかる。来日時にタゴールが熱狂的な歓迎を受けたことは確かだとしても、多くの知識人、特に当時を代表する作家や詩人が初めからタゴールに対して冷淡であったことは特筆に値する。またタゴールのスピーチを読めば、そこには日本に期待することが述べられているものの、日本人の感情を逆撫でするような「日本批判」は特に見当たらないこと、多くの日本人のタゴール批判はスピーチを咀嚼したうえでのものではないことは簡単に見てとれる。

実はこのタゴール初来日時の問題の背景には、両者のねじれた関係があり、ある意味この「騒動」は当時の日本を映す鏡にもなっている。このテーマの代表的な先行研究にはStephan Hayの*Asian Ideas of East and West* (1970)があるが、彼による「西洋化した知識人はタゴールを擁護したが伝統的な立場に立つ日本人はタゴールを批判し、彼のメッセージを拒絶した」という構図にも疑問がある。

本書はこれまでにさまざまなおりにこのテーマで筆者が発表した小論やスピーチ原稿をまとめたものである。“Rabindranath and Japan”は1916年に始まるタゴールと日本の関係を、現在に至るまでできるだけ正確に辿ったもの、“Rabindranath Tagore’s Message to Japan”と“Rabindranath Tagore and Japan: His Visit with a Message and Its Outcome”は1916年のタゴールのスピーチとそれに対する日本の反応を見直したもの、“Rabindranath and Noguchi Yonejiro”はタゴールと親密な関係にあったとされる野口米次郎の複雑な立ち位置と、二人の実際の間接関係を捉え直した一文である。また、タゴールは本来詩人であり、その詩人としての真価が理解されているかどうかがこのような関係性の鍵となるわけだが、“Translating Poetry”では日本におけるタゴール紹介と詩編の翻訳のむずかしさを論じた。さらにタゴールの側からの日本理解や文学上の影響に触れたのが“Rabindranath’s Short Poems with Reference to Japanese ‘Haiku’”である。

タゴールについて日本で多くの誤解があるように、インドにおいても日本におけるタゴール受容に関して多くの誤解が存在する。この本が少しでも誤解を解くものになればと願っている。

(丹羽京子)



